山のこころ

昭和四十九年三月二十日初版発行
著者　福田宏年　発行者　松田清
発行所　日本交通公社出版事業局
東京都千代田区神田鍛冶町三―三
郵便番号一〇一　電話東京二五六
―三四八一　振替東京二九四〇三
印刷　交通印刷　製本　交通製本

©一九七四　検印省略
四八―一五一

山のこころ

福田宏年

山のこころ　目次

山に想う

山との奇妙な出会い　8
山に憧れる心　19
虚栄の山　29
山岳部長の思い出　37
伝　統　51
唯一の教え子部員　57
登山家の気質論　62
先人の書から教訓を　70
ヒマラヤの探検時代は終ったか　74
遠征隊の団結について　90
五月のイメージ　96

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertong

山と文学

山を描いた文学の魅力　102
峠の明暗　114
山の湖のロマンティシズム　127
井上靖の「氷壁」について　141
登頂記の背後にあるもの　145
ヒマラヤの非文学性　148
深田久弥氏の思い出　152

山頂への道

ヒマラヤの印象　160
シェルパの村を訪ねて　170
雪原の宿り　182

ヒマラヤの味 187
少年シェルパ 195
コーカサスのお礼参り 201
パミールの雪 209

山頂の憩い

北穂池の思い出 212
穂高の犬 218
涸沢の初滑り 221
「氷壁」の旅 224
家族登山 229
思い出の山の湯 239

山に想う

山との奇妙な出会い

なぜ山に登るのか、という問いは、恐らく近代アルピニズムが始って以来、何回となく問われ続けてきたものであり、今後も相変らず問われ続けていくであろう。この問いに対して、昔から有名無名多くの人が百人百様の答え方をしてきたが、その多くは第二次的な動機や契機について語ったものである。人間の心の奥深い憧憬あるいは衝動としての登山の秘密に触れたものは、あまり見当らないように思う。

だが逆に考えると、なぜ登山についてだけ、それほど執拗に理由や動機が問題にされるのだろうという疑問が自ずと湧いてくる。なぜ歌を唱うのか、なぜ絵を描くのか、ということはあまり問題にされないのに、なぜ山に登るのかということだけがしつこく問われるのは、どういうわけであろう。それは登山が苦しさときびしさを過度に要求するためかもしれない。だが苦しさときびしさを要求するスポーツは、ほかにもたくさんある。なぜマラソンをやるのか、なぜラグビーをやるのか、ということはあまり問題とされないのに、なぜ山に登るのか、ということが繰り返し問われるのは、ど

ういうわけであろう。思うにそれは、ほかのスポーツに比べて、登山が常に死の危険と隣合わせているからであろう。なぜ山に登るのか、ということは、なぜ死の危険を冒してまで山に登るのか、ということであろう。つまり、死ぬほどの危険を冒して登るくらいだから、山には余程の秘密の魅力があるに違いないということであろう。したがってこの問いは、登山家自身の内発的な問いであるよりは、登山家以外の人間の傍観者的立場から発せられることが多いように思う。

私のような人間にまで、なぜ山に登るのか、という問いが向けられることがある。もちろん私にそんなことが分かるはずも、答えられるはずもない。私は登山家でも山の専門家でもない、ずぶの素人である。何年か前までは私も、汗を流して山に登る人間を眺めて、どうしてあんなにまでして山に登るのだろうと思っていた人間である。私は中学の五年間はバスケットボールの選手生活を送った。高等学校と大学は運動は一切やらず、極めて怠惰な生活を送って酒ばかり飲んでいた。中学時代には、学校にも登山部というのがあったが、四国の中学だから、大した山には登っていなかったであろう。

はげしいバスケットボールの練習に明け暮れながら、弁当持って暢気に山登りになど出かける連中を、女学生みたいな奴らだと思っていた。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertong

大学を出て私は学校の教師になり、比較的勤めが暇なものだから、登山家の友人たちに誘われて時おり山に行くようになった。最初は渋々腰を上げるといった気持だった。それでも、南国育ちで雪を知らぬ私は、夏に雪の上を歩くなんてちょっといい気持のものかもしれないと、いささか胸躍る気持もなくはなかった。始めて涸沢のモレーンの上から穂高連峰を見た時の驚きは忘れることができない。それはいささかの誇張もなく、目の鱗が落ち、胸が洗われるような思いであった。しかし、それでも私はわざわざ暇を作って、時々ここに出かけてこようという気持にまではならなかった。その素人の私が、登山家の友人の口聞きで、ドイツの山の本を翻訳することになった。今考えれば、盲目蛇に怖じずで、よくやったものと思う。ところが、素人の訳した山の本の翻訳がきっかけとなって、その頃勤めていた立教大学の山岳部の部長に推されることになった。どうせ床の間の置物だから、素人にも勤まるだろうと思って気軽に引き受けたが、これも素人の怖いもの知らずである。今の私だったら、立教大学山岳部の伝統の重さを考え、遭難の危険を慮って、決して引き受けはしない。

始めて部室を訪れた時の印象は今も非常に鮮かである。体育館の地下にある穴倉のような部屋に入って私は驚いた。狭い部屋のなかで、部員たちの坐る席は自ずと決っているようである。左端の物置同然のところには一年生が坐って、大まじめな顔で物

も言わずに姿勢を正している。学年が上るにつれて態度も次第にでかくなる。右端の書棚のところに陣取った四年生のリーダーたちは、まるでわが家の茶の間にいるような雰囲気で大声で談笑し、合間に一年生に用事を言いつけて、奴隷のように顎でこき使っている。言ってみればタコ部屋である。トレーニングや合宿の時のシゴキ振りが眼に浮ぶようである。部長の私がいてこれだから、私のいない時の空気は推して知るべしである。床の間の置物で通すつもりだった私も、これはなんとかしなければならぬと思った。しかし、山に素人の新米部長に、一朝一夕になんとかできることではない。私はできるだけ部室に顔を出して、上級生にも下級生にも同じように声をかけ、明るい雰囲気を作り出すように心がけた。

しばらくするうち、私は生れて始めて、「なぜ山に登るのか」ということを、深刻に考えるようになった、というより考えざるを得なくなった。それはこういうことである。登山に憧れて、胸ふくらませて山岳部に入ってきた新入生は、真実山が好きで、山を楽しもうと思って入部してきたはずである。しかし、大学山岳部の雰囲気というのは、およそ山を楽しむという雰囲気からは遠い。まさにそれはタコ部屋である。最終目的のヒマラヤ遠征を考え、実力を養い、安全確実な登山をめざすには、タコ部屋

的シゴキにも、一見無理からぬところもある。その点で、大学山岳部というのは、というより登山というものは、一方で山登りの醍醐味に憧れながら、他方では常に実力涵養と安全確実のためにきびしいトレーニングを強いられる。言ってみれば、常に二律背反のディレンマにさらされているわけである。

つまり、単に山が好きだから、あるいは山で楽しむためにということだけでは、登山というスポーツが成立し得ないことが、私にも少し分りかけてきたわけである。山に登るというのはどういうことだろうと、私は考えざるを得なくなった。このディレンマに対するひとつの解決策は、部員相互の間に精神的な連帯感を築き上げることであった。それがあれば、どんなつらいトレーニングも、喜んで耐えることができるし、苦しみを楽しみに転ずることもできる。私は折に触れて部員たちにこのことを話し、連帯感を作り上げるように心がけたが、これほど言うは易く、行うに難いこともないであろう。それには長い地道な努力の積み上げを必要とする。

新入部員たちは、夏山合宿のきびしい体験を終えると、ほとんど例外なく私の家をひそかに訪れて、山岳部をやめたいと訴えた。私は最初は、合宿中のつらい話を聞き、無理難題の上級生の話を聞き、やめたいと思うのも無理はないと思った。なかには両親同伴で訪れて退部を懇願されることもあった。そのようにして山岳部をやめた

連中も、決して山を見捨てたわけではなく、部を離れたところで、気の合った友人と楽しい山登りを満喫するということが多い。その間、私はできるだけ年間六回の合宿にも部員たちと一緒に出かけていくように心がけ、部員たちがキャンプから岩登りに出かけたあと、付近を歩いて楽しみ、山の醍醐味に接するようになった。

山の醍醐味が少しずつ分りかけ、部員のなかに融けこんだことが多少なりとも感得できるようになると、私は新入部員が訪ねてきて部をやめたいと訴えられても、何かと言辞を弄して引き止め役に廻るようになった。冬山合宿が終わるまで、あるいは二年生になるまで我慢してみろ、それでもなおやめたかったら、その時に改めてもう一度一緒に考えてみよう、という風に。ところが不思議なもので、二年生になると、やめるなどとはプツリとも言わなくなる。三年生になると、そんなことを言ったのはどこの誰だといった顔をしている。ひょろひょろと生白い新入生が、がっしりと色黒の山男に急速に育っていくのを見るのは気持よかった。さらに私は、トレーニングに関しても、殴るなとは言わないが、殴るなら自分の納得のいく殴り方をしろ、とまで言うようになった。

私は自分が、タコ部屋的なきびしいトレーニングを肯定しかねない気持に傾いているのに気付いて、はっとしたことがある。

山岳部長になって三年目に、ヒマラヤ遠征の話が起った。若いOBたちが遠征計画を練っていることは耳にしていたが、私はいわば人事として横目で眺めていた。ところが遠征が本決りになった時、隊員たちが私の家までやってきて、色よい返事を聞くまでは帰りませんと、私に同行を求めてきた。正直言って、冗談じゃないという気持だった。だが生来の弱気のせいで、遂に口説き落されて、寄付金集めなどにも走り廻るようになった。いざとなったら誰かに代って貰えばいいというつもりであった。それが、ついずるずると、東ネパールのダランからキャラバンの第一歩を始めることになった。

二十日間近いキャラバンの末にバルン氷河のベースキャンプに着いた頃には、私が何もできない素人だということは、シェルパたちにもはっきり分っていた。隊員たちが氷の斜面をすいすいとグリセードで下る時にも、シェルパが私には丁寧にステップを切ってくれる。アイゼンを出せば、ちゃんと結んでくれる。雪原を歩く時には、ちゃんとアンザイレンのザイルを身体に結びつけてくれる。こんな隊長がどこにあろう。こんな登山家がどこにあろう。そんな素人でも、というより素人だから、生命の危険に出会ったことは何度かある。しかし、不思議なことに、その時には、死ぬかも知れないといった、切実な危機感というものはない。後で思い返してみてひやりとする程

度である。垂直の岩壁の三〇センチほどの幅のバンドを、両側からシェルパにベルトを摑まれて一寸刻みに越えた時も、千メートル下に湖が小さく見えていながら、不思議に恐怖感はなく、ただなんとかして越えなければという一念だけである。実際に山に登っている者には死の恐怖というのはほとんどなく、死の危険まで冒してなぜ山に登るのかと問うのは、傍観者だけだということも、この時、始めて悟った。

当然のことながら、私は登山の一切について、一度も口出ししたことはなかった。ただ一度だけ例外がある。第一キャンプから第二キャンプに向うには、谷底の平坦な道を取った。だがこの道は、左手の上方に氷河の末端がせり出していて、家の大きさもあるブロックが今にも落ちてきそうである。事実、谷底には落ちて砕けた氷塊が散乱している。ある日、私のいる第一キャンプへ、第二キャンプから二人の隊員が連絡に降りてきた。第一キャンプに着いた途端、腹にひびくような独特の音が起った。瞬間私たちは顔を見合わせた。例のブロックが落ちたことは明らかであった。私は「もっと安全な道は考えられないかな」と、ひとり言のように呟いた。「分りました」と、隊員は短く答えた。第二キャンプに帰る二人を、私は山裾を大きく巻くガラ場の道の途中まで見送った。こちらの道はひどく歩きにくく、時間もかかったが、雪崩の危険はなかった。その時私は、自分が「なぜ登るか」ではなく、「いかに登るか」しか考

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertong